恋愛関係における相互作用構造の研究¹

——階層的データ解析による間主観性の分析——

清水裕士² 大坊郁夫 大阪大学

The structure of interaction in romantic relationships: Hierarchical data analysis of inter-subjectivity between partners

Hiroshi Shimizu and Ikuo Daibo (Osaka University)

A hierarchical data analysis was conducted using data from couples to examine how self-reports of interactions between partners in romantic relationships predict the quality of the relationships. Whereas the social exchange theory has elucidated the quality of relationships from the individual level of subjectivity, this study focused on the structure of interactions between the partners (i.e., the frequency, strength, and diversity) through a process of inter-subjectivity at the couple level. A multilevel covariance structure analysis of 194 university students involved in romantic relationships revealed that the quality of relationships was mainly related to the strength and the diversity of interactions at the couple level, rather than the strength of interactions at the individual level. These results indicate that the inter-subjective process in romantic relationships may primarily explain the quality of relationships.

Key words: structure of interaction, quality of relationships, couple data, multilevel covariance structure analysis, romantic relationships.

The Japanese Journal of Psychology
2008, Vol. 78, No. 6, pp. 575-582

対人関係研究における主な関心は、対人魅力要因の探求、関係発展メカニズムの解明などである。これらの研究の目的の一つは、継続的な関係性の形成はいかにして可能かを明らかにすることであるだろう。継続的な関係性を形成するための要因として、関係の満足感やコミットメント（関係への関与の強さ）などがあげられ、それらを予測するモデルが数多く提出されている。その代表的な理論である、社会的交換理論では個人が得られる成果量やそれまでの関係への投資量といった経済学的な概念によって説明を行っている（Adams, 1965）。例えば社会的交換理論の一つであるRusbult（1980）の投資モデルでは、関係への満足感が報酬とコストから予測され、関係へのコミットメントが満足感とそれまで関係に費やしてきた投資量、そ

して代替関係から得られるだろう報酬といった変数によって予測されるとしている。

しかし、社会的交換理論の予測はその精度の高さをもっている反面、関係性を個人の認知や感情、つまり個人の主観性によって説明しているという限界がある。清水・大坊（2007）では、社会的交換理論が個人からの出力・入力（投資・成果）を分析の対象としているが、その交換プロセスまで議論されていないことを指摘している。個人がパートナーに投資し、それをパートナーがどのように認知するか、という循環モデル（Wieselquist, Rusbult, & Foster, 1999）は社会的相互作用を対象としているのではなく、結局は個人内のプロセスを表現しているにとどまっている。つまり、個人の主観性の中に関係性を還元してしまっているという理論的問題点が指摘できる。Hogg（1992 廣田・藤澤監訳, 1994）は、例えば集団凝集性という人々に共有された概念が個人の態度や魅力といった個人に還元される概念では説明できないこと、そして集団凝集性が成員全体の性質を反映した概念であることを主張している。また、Gonzalez & Griffin（2000 石盛訳, 2004）が指摘するように、恋愛関係にあるペアの関係性を個人の性質だけによって表現することには限界が

Correspondence concerning this article should be sent to: Hiroshi Shimizu, Graduate School of Human Sciences, Osaka University, Yamadaoka, Suita 565-0871, Japan (e-mail: simizu706@ybb.ne.jp)

¹ 本論文は、第一著者が大阪大学大学院人間科学研究科に2004年度の修士論文として提出したものを加筆・修正したものである。また、本研究の一部は日本社会心理学会第46回大会にて発表された。

² 本研究の調査実施にあたり、愛知淑徳大学の齊藤和志先生、小川一美先生のご協力を賜りました。ここに謝意を表します。

あると考えられる。それは、関係性は成員に共有された間主観的な概念であるからである。

なお、間主観性（相互主観性、共同主観性とも呼ぶ）とは、Husserl の超越論的現象学において提案された概念である（Husserl, 1936 細谷・木田訳, 1974）。間主観性は廣松（1995）によれば“自分と他者達とが、相互に主体として承認し合いつつ単一の世界を共有すること”と定義される。つまり、他者は自分と同じように対象を主観的に認識していることを了解しながらも、対象への認識を共有することであるといえる。

以上の議論で問題とされているのは、関係性は成員に共有されている間主観的な概念であること、そして間主観的な関係性を個人の主観性に還元することでは、その性質を十分に理解することができないこと、である。

そこで本研究では、恋愛関係にあるカップルの相互作用が関係良好性をどのように形成するのかを、間主観的なモデルによって明らかにすることを目的とする（モデリングについては分析法のところでも詳しく述べる）。本研究における関係良好性（quality of relationships）とは、“カップル双方によって関係が継続することが予期され、またカップルが関係に凝集している状態”を指す。上記の目的を達成するために、本研究では以下に示す相互作用構造と階層的データ分析に注目し、それによって社会的交換理論の理論的、方法論的問題点を克服する。

カップルの相互作用構造

清水・大坊（2007）では、“対人関係において、ある期間で見られる社会的交換過程の性質”を相互作用構造と呼んでおり、相互作用における個々の行動ではなくその全体性に焦点を当てている。具体的には、Kelley, Berscheid, Christensen, Harvey, Huston, Levinger, McClintock, Pelau, & Peterson（1983）の因果分析モデルを参考に相互作用構造の指標化を行っている。因果分析モデルは親密な二人の相互影響過程を、影響頻度、影響強度、影響多様性という三つの性質で表現しており、それらを相互作用構造の指標として用いている。

相互作用構造をとりあげるのは、“どんな行動を行うか（行動一つ一つの性質）”よりも“どのように行動を行うか（行動パターン）”によって、関係性がより説明されると考えられるからである。対人コミュニケーションの研究においても、話者の関係が笑顔や視線といったチャネル一つ一つよりもその返報性や時系列的なパターンによって表現されることが指摘されている（Cappella, 1988）。

また、相互作用構造に注目することの利点は、これまでの対人関係研究のように個人に関係を還元せずに

モデルを構築できることにある。相互作用構造はカップルで行われている行動を要素として、それらがどのように行われているかを表現する概念であり、個人の主観性におさまるものではない。

ここで相互作用構造の測定について触れる。清水・大坊（2007）では相互作用構造を RCI（Relationship Closeness Inventory；Berscheid, Snyder, & Omoto, 1989；その邦訳版として久保, 1993）によって測定している。RCI はもともと親密性を測定する目的で作成されているが、本研究では親密性ではなく、相互作用構造を測定することが目的であるので、測定方法に修正を加えた。RCI は相互影響の頻度、強度、多様性それぞれを異なった視点で操作的に定義し、総合的な親密性を測定するものである。だが本研究の目的から、相互作用構造の概念的妥当性を確保するために各要素の操作的定義を一貫したものにすることが必要である。

そこで一貫した操作的定義によって相互作用構造の諸性質を測定するために、一般的なカップルが日常的に行う恋愛関係特有の行動（以下恋愛行動とする）をとりあげる。恋愛行動の具体的な収集方法については、予備調査の項目に記している。

そしてそれぞれの行動について、どれほど頻繁に行っているか（頻度）、どれほど親密であると思っているか（強度）、どれほどの種類行っているか（多様性）、を測定することで上記の問題を回避することを試みる。影響強度の操作的定義として恋愛行動の親密さを用いること理由は、本研究が、相互作用が個人ではなく関係に影響を及ぼすものであるという視点をとっていることによる。そして、関係性にとって意味があるのは、個人がどんな成果を得たかではなく、その行動によって“恋人らしさ”を確認しあえることである（山根, 1987）。よって、相互作用構造の性質としての影響強度は、カップルの恋愛行動が親密である程度として定義することは妥当であると思われる。

関係良好性の測定と階層的データ分析

先にあげた清水・大坊（2007）の研究では、ペアワイズ相関分析（Griffin & Gonzalez, 1995）という分析手法を用いていることで、関係良好性を主観的な概念に還元せずにモデルを構築した。ペアワイズ相関分析は、カップル内での得点の類似性を算出し、データから完全に一致した部分と完全に一致しない部分に分け、カップルデータの相互依存性を解決する分析手法である。

しかし、清水・大坊（2007）では関係安定性の指標を関係満足度やコミットメントによって測定しており、解釈的に困難であったことが問題点として指摘できる。満足感やコミットメントは関係性を反映したものではあるが、個人の主観的な要素が多く含まれる概念である。

カップルに共有された間主観的な概念である関係良好性を研究の対象とするためには、関係の状態（関係の安定性や凝集性）を測定する必要がある。そこで本研究では、清水・大坊（2005）で開発された、親密な関係における関係性認知尺度を用いる。この尺度は、カップルが関係をどのように認識しているのかを測定するものである。

ここで、測定上個人の認知を測定しなければならないことによって、結局主観的な概念を扱わなければならないという問題が現れてくる。しかし、上述したペアワイズ相関分析のような手法を用いることで一応の解決を図ることができるであろう。つまり、測定としては個人内の認知を対象とし、そのための分析として間主観的なレベルでモデリングするのである。

そこで本研究では、個人-関係という階層性を分析することができる、多段共分散構造分析（Multi-level Covariance-structure Analysis：以下MCAとする）を用いてカップル・個人レベルの分析を行う。MCAを用いる理由は、(a) ペアワイズ相関分析では不可能な（Gonzalez & Griffin, 2000 石盛訳, 2004）、因果方向を仮定したパス解析を行うことができる、(b) MCAは構造方程式モデリング（Structure Equation Modeling：以下SEMとする）の下位モデルであるため、多様なモデリングや適合度指標の出力を容易に実行することができる、などがあげられる。

MCAは二段（多段）抽出モデルとも呼ばれ、そもそもは層化抽出法のときに1次抽出単位内で類似性（級内相関）が現れることへの対処として開発された。1次抽出単位内でデータの類似性が見られる場合、サンプルの独立性仮定に違反し、正しい推定値の算出と有意性検定を行うことができない。この問題を回避するために、1次抽出単位内（Within モデル）と1次抽出単位間（Between モデル）にデータを分割し、それぞれについてモデリングを行うのである。本研究では、カップルを1次抽出単位とし、Within モデルが個人レベル、Between モデルがカップルレベルとなる。MCAについての詳細や分析手法の説明についてはMuthén（1994）、狩野・三浦（2003）、あるいは清水・村山・大坊（2006）にある。

なお、本論文において主観-間主観とは理論上、概念上でのレベル区分であり、個人-カップルとはデータ上、分析上のレベル区分である。このことは、清水・大坊（2007）がカップルで共有した部分を間主観性、個人独自の部分を主観性と位置づけ、分析の解釈を行っていることに基づいている。データとしてカップルで共有されている部分はカップルのなんらかの性質を表していると考えられるが、それは客観的なデータというよりは、共通した事象に反映されて現れたものであると考えられる。そのため、本研究の理論的視点においても、操作的に間主観的な概念を測定したも

のとして結果の解釈を行う。このことは、直接的に間主観性を測定できないことへの解決策である。

本研究の仮説

本研究の目的は“恋愛関係にあるカップルの相互作用が関係良好性をどのように予測するかを、間主観的なモデルによって明らかにすること”であった。相互作用構造の指標として、カップルの恋愛行動の頻度、強度、多様性という三つが挙げられる。また関係の良好性は清水・大坊（2005）の関係性認知尺度によって測定する。

清水・大坊（2007）では関係満足感、コミットメント、関係継続予期に及ぼす相互作用構造の影響を検討しており、カップルレベルでは多様性が、個人レベルでは強度が関連することを明らかにしている。また、社会的浸透理論（Altman & Taylor, 1973）が、自己開示の“深さ”と“幅広さ”が二人の自己概念の浸透を促進することを主張していることから、相互作用構造の強度と多様さが良好な関係性の形成に関連することが予測される。

さらに、上記の予測はカップルレベルにおけるモデルによって主に説明されると予測できる。それは関係性が個人の性質に還元できないというHogg（1992）やGonzalez & Griffin（2000）の主張による。

以上の議論をまとめ、仮説を整理する。

仮説 相互作用構造の多様性と強度が、カップルレベルにおける関係良好性を予測するだろう。

予備調査

予備調査は、相互作用構造を測定するための恋愛行動を収集することを目的とした。

調査対象および調査方法

大阪府の大学1年生72名に対し、最も親密な異性と日常的にどのような行動を行っているかについて、心理学の授業中に自由記述式の回答を求めた（このうち、本研究で用いたのは現在恋人がおり、また恋人との行動について回答した19名の回答のみである）。また大阪府の大学院生13名（男性6名、女性7名）に対し、大学院のゼミナール中に一般的な恋愛関係のカップルが行っている行動をブレインストーミングしてもらい、恋愛行動項目を収集した。また、恋愛行動の構造を分析した松井（1990）によって収集されている28の恋愛行動も加えた。

収集した恋愛行動項目の中で、意味が重複するものの、恋愛行動としてふさわしくないとと思われるものを除き、56項目の恋愛行動を選出した。

そして大阪府にある大学院のゼミナール時に、大学院生12名（男性6名、女性6名）に一般的な恋愛関係のカップルが上記の56行動について、“どれほど頻

Table 1
本調査で用いた恋愛行動30種

さびしいときに話をする	一緒に買い物に行く	一緒に散歩をする
用もないのに電話する	子どものころの話をする	一緒に料理を作る
愚痴を聞く, 聞いてもらう	一緒にカフェに行く	口論をする
相手にわがママを言う, 言われる	やきもちを示す, 示される	デートの計画について話す
一緒に音楽を聴く	セックスをする	優しい言葉をかける, かけられる
悩みの相談をする	友人や勉強の話をする	困っているときに助ける, 助けられる
喧嘩をする	用もないのに会う	他の人に見せない面を見せる
家族の話をする	映画を見る	記念日に特別なことをする
二人の将来の話をする	キスをする, される	好きな思いを伝える, 伝えられる
プレゼントを贈る, 贈られる	まじめな話をする	甘える, 甘えられる

繁に（日常的に）行っているか”という恋愛行動の“日常性”と, “どんなカップルでも行っているか”を問う恋愛行動の“一般性”について5件法で評定を求めた。日常性が高すぎる, 低すぎる項目は, 相互作用構造の性質の測定において天井, 床効果を起こす可能性があるため, それらを考慮するために測定した。また, 一般性は個人のステータスや特性の影響（例えば, “酒を飲む”という行為は飲酒が可能な人しか行えない）を統制するために測定した。

得られたデータにおいて(a)頻度が2点以上4点未満の行動, (b)一般性が2点以上の行動, という二つの基準によって29項目の恋愛行動を選出した。ただし, 恋愛関係において特徴的な性的行動として“セックスをする”しか含まれていなかったため, 一般性が高い“キス”を含め, 合計30の恋愛行動を本研究で用いる恋愛行動項目とした(項目はTable 1参照)。

本調査

調査方法と対象者

近畿地方の三つの大学および中部地方の一つの大学において, 大学生を対象に調査を実施した。調査は各大学における心理学関連の授業中に“親密な異性との関係についての研究”と教示した上で, 以下の方法で行った。

質問紙は一つを本人に, もう一つをパートナーに回答してもらうように依頼した(同一内容)。質問紙を調査対象者に渡す際, パートナーと相談せず別々に回答し, 回収の際には封筒に入れ必ず封をするように念を押した。また, 調査への協力は任意であり, 質問紙を読んで回答が困難な場合は質問紙をそのまま返却するように伝えた。質問紙の回収は手渡した次の週の授業時に行った。また, 報酬に関しては回収の際に2組とも持ってきた回答者に対して1人につき150円相当(ペアなので1組300円相当)の文房具を渡した。

全部で905組に配布し, ペアで回収された回答が

290組であった。その中で恋愛関係にある大学生, 大学院生から194組(男性:平均年齢=21.66歳, 標準偏差=4.79歳 女性:平均年齢=20.58歳, 標準偏差=3.16歳)の回答を得た。カップルの平均交際期間は15.75カ月(中央値=12カ月, 標準偏差=15.19カ月)であった。

質問紙の構成

恋愛行動 予備調査で得た30の恋愛行動について, 四つの質問項目を設けた。一つめは“以下の行動をそれぞれ恋人とどの程度行いますか”という項目で, 5件法で評定を求めた(1:まったくしない-5:非常に頻繁にする)。これは相互作用の頻度を測定するものである。二つめは“以下の行動を2人で行うことはどれほど親しみを感じるものだと思いますか”という項目で, 5件法で評定を求めた(1:まったく感じない-5:非常に感じる)。これは相互作用の強度を測定するものである。三つめは“以下の行動のうち, この1カ月の間2人きりで行った行動に○をつけてください”という項目で, 0-30の31段階評定であった。これは相互作用の多様性を測定するものである。また, 調査実施においては, 相手から自分だけでなく, 相手から自分への行動(例:キスをする, キスをされる)も含まれるようにワーディングを変更した。

関係性認知 清水・大坊(2005)による関係性認知尺度16項目をSD尺度5件法で測定した。この尺度は恋愛関係の雰囲気測定するSD尺度であり, 4因子からなる(緊張感因子(“はりつめた”, “気重な”など:5項目), 重要性因子(“大切な”, “仲の良い”など:5項目), 不確実性因子(“不安定な”, “心配な”など:4項目), 活発性因子(“にぎやかな”, “明るい”など:4項目))。

Table2
各変数の記述統計量

変数	平均値	標準偏差	最小値	最大値	α 係数	級内相関
頻度	96.33	18.09	50	146		.59 **
強度	4.20	.46	2.77	5.00		.36 **
多様性	22.85	6.35	2	30		.57 **
関係良好性	3.99	.45	2.22	4.89	.86	.47 **

** $p < .01$

結 果

変数の得点化

測定された各変数について、以下のように得点化した。各変数の記述統計量を Table 2 に記す。

頻度 30 の恋愛行動を行う頻度の合計値を算出し、それを得点とした。

強度 30 の恋愛行動それぞれについて、感じる親しさに頻度を掛け合わせた得点を算出し、その合計値を頻度の総和で除したものを得点とした。この指標化によって、それぞれの行動について頻度によって重み付けられた影響の強さを算出することができ、頻度が少ない恋愛行動は強度が低く評価されるようになる。

多様性 30 の恋愛行動のうち 1 カ月で行った行動数を多様性の得点とした。

関係良好性 本研究では関係良好性を測定することが目的であること、また因子分析の結果においても第 1 因子の固有値が非常に大きかった ($\lambda=5.78, 1.85, 1.28\cdots$ ：なお、抽出法は最尤法) ことから、関係性認知尺度を下位因子ごとに算出せず、16 項目の合計得点を算出して“関係良好性”得点とした。 α 係数は .86 と高い信頼性が得られた。

各変数の級内相関係数の検討

相互作用構造の各指標、関係良好性について、級内相関係数を Table 2 に記す。級内相関係数とは、カップル内でどれほど得点が類似しているのかを表す指標である。つまり、級内相関係数が大きい変数は、カップルで共有されている割合が大きく、主観的な部分よりも間主観的な部分が多いことを表す。すべての変数の級内相関係数は有意であった ($p < .01$)。つまり、すべての変数がカップルで共有している部分が含まれていることを示している。また、相互作用構造の各指標は頻度と多様性が比較的高い類似性が見られた。ついで関係良好性も高い類似性が見られた。

MCA による分析

次に、MCA によるモデルの検証を行った。本研究では簡便法である Muthén 法 (Muthén, 1994) を用い

た³。Muthén 法は、各クラス内のサンプル数が等しいとき最尤法と結果が一致することが知られている。本研究ではクラス内のサンプル数はすべて 2 であるため、簡便法を用いることのデメリットはない。Muthén 法によって MCA を実行するためには、Within (=個人レベル) と Between (=カップルレベル) にデータを分割する必要がある。そこで清水他 (2006) によって開発された Muthén 法の事前分析用ソフトである HAD3⁴を用いて個人レベルとカップルレベルの共分散行列を得た。また、変数の級内相関係数の推定と有意性検定もこのプログラムを用いて算出している。

各レベルの共分散行列を SEM のソフトウェアである Amos に投入し、カップルレベルと個人レベルごとにモデリングを行った。なお、Gonzalez & Griffin (1999) はカテゴリーによって識別可能なデータを階層的に分析する場合、その効果を統制すべきであることを述べている。本研究では性別によって識別可能なデータであるため、すべての変数について性別の効果を統制した。最終的なモデルを Figure 1 に記す。

個人レベルでは、関係良好性へのパスは相互作用構造の強度が有意であり、個人が相互作用を親密であると思うほど関係を良好であると認知していることが示された。カップルレベルでは、関係良好性へのパスは相互作用構造の強度が有意で、多様性が有意傾向であった。この結果から、カップルが親密で多様な相互作用を行うことによって関係が良好になることが本研究でも示された。

考 察

本研究では、恋愛関係における関係良好性が相互作用構造によってどのように形成されるのか、また関係

³ 多段共分散構造分析におけるカップルレベルの分析は、カップルの平均値を用いた分析とは異なる。カップルの平均値の共分散行列は、真のカップルレベルの推定値と個人レベルの推定値の両方を含んでいる (豊田, 2000)。簡便法では、カップルの平均値の共分散行列から、個人レベルの効果を多母集団同時分析によって取り除くことで、真のカップルレベルの共分散行列を推定している。

⁴ HAD3 は <http://norimune.blog15.fc2.com/> からダウンロードできる。HAD3 の使い方についても同 HP 上に記載している。

良好性が個人の満足感に及ぼす影響について検討することを目的とした。相互作用構造の指標として相互作用の頻度、強度、多様性を、カップルが日常的に行う恋愛行動によって測定し、得点化した。

関係良好性を形成する要因として、強度が有意、多様性がかろうじて有意であることがカップルレベルの分析によって明らかとなった。これらの結果は満足度を従属変数とした清水・大坊 (2007) においても一貫して得られた結果であり、関係良好性への強度と多様性の効果は信頼性の高い知見であると思われる。これらの結果から、仮説である“相互作用構造の多様性と強度が、カップルレベルにおいて関係良好性を予測するだろう”は支持された。

相互作用の強度は本研究では“感じる親しさ”として定義されており、分析の結果はカップルがより親密な行動を行うことが関係良好性を形成する要因であることを示している。つまり、恋愛関係のような互いに信頼しあう関係においても、日常的に依存性を伝達し、確認しあう相互作用を行っていくことが必要であることがわかる。

有意傾向ではあったが、相互作用の多様性が関係良好性の形成に役立つという知見は、共有された活動をより幅広くもつことがカップルの相互依存性を高める要因となっていることを示すものであると考えられる。様々な側面についてカップルが互いを知り、触れ合うことで、2 人の生活空間の共有範囲が広がっていくのである。これは Lewin (1948 末永訳, 1955) が夫婦関係について、生活空間の重なり合う部分の大き

さが結婚生活の雰囲気の良いや葛藤の低減に大きな影響を及ぼしうると論じた分析とも一貫する。

また頻度について、相関分析において関係良好性とポジティブな関連が見られたが、説明要因として有意な効果を示さなかった点についても考察する必要がある。つまり、相互作用において頻度は重要であるが、それは多様性を高めるために必要な相互作用量を確保する意味においてである、ということが示唆される。換言すれば、相互作用の頻度が高くても同じことを繰り返して行っているとは良好な関係を築くことはできないのである。

相互作用構造の強度と多様性をもつ関係性への機能については、清水・大坊の一連の研究や、そのものというわけではないが社会的浸透理論による予測とも一致する。すなわち、カップルの相互依存的な状態は、自己開示のような言語的な相互作用だけでなく、様々な活動の“深さ”と“幅広さ”という 2 側面によって説明されることが示唆される。

また、カップルレベルのモデルと個人レベルのモデルでは、カップルレベルが個人レベルの説明力の 5 倍以上であった⁵。このことから、親密な関係性は個人

⁵ 多段共分散構造分析では、カップルレベルが誤差を含まない推定値であるのに対し、個人レベルは測定誤差が含まれるため、相関関係が希薄化されている（つまり説明力が小さくなっている）可能性は否定できない。しかし、関係性認知尺度の信頼性が十分に高かったこと、級内相関係数が十分に大きかったこと、説明力の差が非常に大きいこと、そして多様性の関連が見られたことから、カップルレベルの関連のほうがより強いことが主張できると考えられる。

Figure 1. カップルの相互作用構造が関係良好性に及ぼす影響
MCA による個人レベル-カップルレベルのモデルの検証

の心の中のプロセスというより、カップルが共有している社会的なプロセスであることを改めて主張することができるだろう。

総合考察と今後の展望

本研究の分析によって明らかになったこととして、(a)恋愛関係において関係良好性を形成する要因は、相互作用構造の強度と多様性であり、(b)またその相互作用構造の影響は、主観的なプロセスというより、間主観的なプロセスに基づいている、の2点である。

これらの知見から、カップルが親密で多様な相互作用を行うことで、関係が良好になるというモデルを考案できる。このモデルは、個人の心理状態に還元してきた従来のモデルとは異なり、個人にとって適応的な関係を営むための方法が示されており、関係改善の可能性が含まれている点特徴的である。コミットメントが長期の関係継続性を予測することを示す実証研究が多いが、これらの結果は一時点の関係がよければその後は特に努力しなくても関係が円滑にいくことを示していることになる。コミットメントや満足感を維持するための行動パターンに目を向けなければならないのであり、またそのためのモデルを構築する必要がある。その意味において、本研究の親密な関係研究への意義は大きいと考えられる。

だが、親密で多様な相互作用を維持することはおそらく簡単なことではなく、むしろ自然にしていれば低下してしまう恐れもある。実際の恋愛関係においては、大きな葛藤がなくても関係が維持できないことがしばしばあるが、まさにそのことが相互作用構造の維持が困難である可能性を示している。本研究の分析はまだ要因探索の段階にとどまっており、実践的な適用にはさらなる研究の積み重ねを必要とする。加えて、本研究は横断的な調査の結果であるので、変容プロセスを明らかにするためには今回のデータだけでは不十分である。ペアデータの縦断データは収集が困難ではあるが、より実践的な知見を得るためには必要であろう。

カップルデータの分析において、本研究はMCAを利用し、間主観的なレベルでのモデルを検討した。この方法と結果の解釈の妥当性については、探索的なところもあり議論の余地があろう。また級内相関が低い場合、逆に非常に高い場合に、各レベルの分析結果が不安定になるという分析上の限界もある(Gonzalez & Griffin, 2000)。しかし、社会心理学による現象の説明において、その要因をすべて個人の心理的構成概念によってモデルを構築することは理論的妥当性を欠いたものとなる。社会現象と心理現象の相互関連を明らかにすることが社会心理学の特徴であるならば、MCAやペアワイズ相関分析のような階層性を取り入れた分析を活用することは必要であり、今後発展が求められ

る方法論であると思われる。もちろん、変数の投入や結果の解釈については十分注意する必要がある。

本研究では、社会的交換理論における個人心理への還元問題を指摘し、間主観性の視点からカップルの相互作用について分析を行った。本研究の知見は恋愛関係を対象としているが、本研究のモデルが相互作用の意味内容ではなく構造的な側面を扱っていることから、他の種類の親密な関係、あるいは集団に対しても十分適用可能であると思われる。他の関係性に適用した場合のモデルの相違などについては、今後の研究で検討していく必要がある。

引用文献

- Adams, J. S. (1965). Inequity in social exchange. *Advances in Experimental Social Psychology*, 2, 267-299.
- Altman, I., & Taylor, D. A. (1973). *Social penetration: The development of interpersonal relationships*. New York: Holt, Rinehart & Winston.
- Berscheid, E., Snyder, M., & Omoto, A. N. (1989). The relationship closeness inventory: Assessing the closeness of interpersonal relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, 57, 792-807.
- Cappella, J. N. (1988). Personal relationships, social relationships and patterns of interaction. In S. Duck (Ed.), *Handbook of personal relationships*. New York: Wiley. pp. 325-342.
- Gonzalez, R., & Griffin, D. (1999). The correlational analysis of dyad-level data in the distinguishable case. *Personal Relationships*, 6, 449-469.
- Gonzalez, R., & Griffin, D. (2000). On the statistics of interdependence: Treating dyadic data with respect. In W. Ickes & S. Duck (Eds.), *The social psychology of personal relationships*. New York: Wiley & Sons. pp. 181-213.
- (ゴンザレス, R.・グリフィン, D. 石盛真徳 (訳) (2004). 相互依存性についての統計学——二者間データの慎重な取り扱い—— イックス, W.・ダック, S. 大坊郁夫・和田 実 (監訳) パーソナルな関係の社会心理学 北大路書房 pp. 221-256.)
- Griffin, D., & Gonzalez, R. (1995). Correlational analysis of dyad-level data in the exchange case. *Psychological Bulletin*, 118, 430-439.
- 廣松 渉 (1995) 廣松渉コレクション第一巻 共同主観性と構造変動 情況出版 (Hiromatsu, W.)
- Hogg, M. A. (1992). *The social psychology of group cohesiveness: From attraction to social identity*. New York: Harvester-Wheatsheaf.
- (ホッグ, M. A. 廣田君美・藤澤 等 (監訳) (1994). 集団凝集性の社会心理学 北大路書房)
- Husserl, E. (1936). *Die Krisis der europäischen Wissenschaften und die transzendentale Phänomenologie: Eine Einleitung in die phänomenologische*

- Philosophie, *Philosophia*, 1.
 (フッサール, E. 細谷恒夫・木田 元 (訳)
 (1974). ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学
 中央公論社)
- 狩野 裕・三浦麻子 (2003). グラフィカル多変量解
 析 増補版 現代数学社.
 (Kano, Y., & Miura, A.)
- Kelley, H. H., Berscheid, E., Christensen, A., Harvey, J.,
 Huston, T. L., Levinger, G., McClintock, E., Pelau, L.
 A., & Peterson, D. (1983). Analyzing close relation-
 ships. In H. H. Kelley, E. Berscheid, A. Christensen, J.
 Harvey, T. L. Huston, G. Levinger, E. McClintock, L.
 A. Pelau, & D. Peterson (Eds.), *Close relationships*.
 New York: W. H. Freeman and Company. pp. 20-67.
- 久保真人 (1993). 行動特性から見た関係の親密さ
 ——RCI の妥当性と限界—— 実験社会心理学研
 究, 33, 1-10.
 (Kubo, M. (1993). Relationships closeness on
 behavioral traits: The validity and limitation of the
 RCI. *Japanese Journal of Experimental Social
 Psychology*, 33, 1-10.)
- Lewin, K. (1948). *Resolving social conflicts: Selected
 papers on group dynamics*. New York: Harper.
 (レヴィン, K. 末永俊郎 (訳) (1955). 社会的
 葛藤の解決 グループダイナミックス論文集 現
 代社会科学叢書)
- 松井 豊 (1990). 青年の恋愛行動の構造 心理学評
 論, 33, 355-370.
 (Matsui, Y. (1990). A structure of romantic love in
 youths. *Japanese Psychological Review*, 33, 355-370)
- Muthén, B. O. (1994). Multilevel covariance structure
 analysis. *Sociological Methods and Research*, 22, 376-
 398.
- Rusbult, C. E. (1980). Commitment and satisfaction in
 romantic associations: A test of investment model.
Journal of Experimental Social Psychology, 16, 172-
 186.
- 清水裕士・大坊郁夫 (2005). 恋愛関係における関係
 性認知が精神的健康に及ぼす影響 対人社会心理
 学研究, 5, 59-65.
 (Shimizu, H., & Daibo, I. (2005). The effect of
 relationship-perception on mental health in romantic
 relationships. *Japanese Journal of Interpersonal and
 Social Psychology*, 5, 59-65.)
- 清水裕士・大坊郁夫 (2007). 恋愛関係の相互作用構
 造と関係安定性の関連——カップルデータへのペ
 アワイズ相関分析の適用—— 社会心理学研究,
 22, 295-304.
 (Shimizu, H., & Daibo, I. (2007). Clarifying the
 association between structure of interaction and
 relational stability in romantic relationships:
 Application of pairwise correlation analysis into dyad
 data. *Japanese Journal of Social Psychology*, 22, 295-
 304)
- 清水裕士・村山 綾・大坊郁夫 (2006). 集団コミュ
 ニケーションにおける相互依存性の分析 (1) ——
 コミュニケーションデータへの階層的データ分析
 の適用—— 電子情報通信学会技術研究報告,
 106, 1-6.
 (Shimizu, H., Murayama, A., & Daibo, I. (2006).
 Analyzing the interdependence of group communica-
 tion (1): Application of hierarchical analysis into
 communication data. *IEICE Technical Report*, 106, 1-
 6.)
- 豊田秀樹 (2000). 共分散構造分析 応用編 朝倉書
 店
 (Toyoda, H.)
- Wieselquist, J., Rusbult, C. E., & Foster, C. A. (1999).
 Commitment, pro-relationship behavior, and trust in
 close relationships. *Journal of Personality and Social
 Psychology*, 77, 942-966.
- 山根一郎 (1987). “恋人”という間柄を意味する諸好
 意の記号学的分析 社会心理学研究, 2, 29-34.
 (Yamane, I. (1987). A semiological analysis on
 conducts meaning the aidagara of lover-sweetheart
 relation. *Japanese Journal of Social Psychology*, 2,
 29-34.)

——2006. 12. 4 受稿, 2007. 7. 14 受理——